

庭 JAPAN みらいをうえるプロジェクト

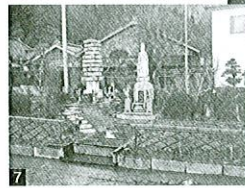
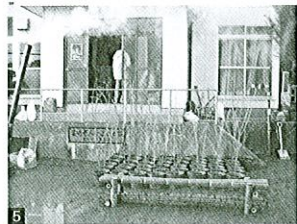
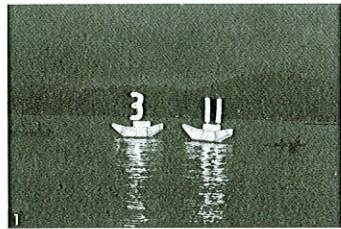
Project 2

木を植え、未来へ続くあかりを灯す

組織概要

「庭 JAPAN」のメンバーは庭師が多いが、実際には業種や活動地域を問わず「心に庭を持つ人」であれば誰でも参加でき、誰がどこでどんなことをやっても良いという緩やかなまとまりの団体。大地震を受け、東日本大震災復興支援プロジェクト 庭 JAPAN を立ち上げた。

<http://niwajapan.blog.shinobi.jp/>



- 1 鎮魂のあかりが海上を照らす
- 2 「とうほくこよみのよぶね」の組み立て
- 3 代表の古川さん(右)
- 4 大槓にて無事の出海を見守る
- 5 祭壇に慰木した桜
- 6 尾崎で作った竹のバリケード
- 7 慰霊塔の復旧
- 8 慰霊祭の準備中
- 9 慰霊塔の竹垣作り

「みらいをうえる」

大地震に襲われ、津波によって甚大な被害を受けた被災地では、特に泥かきや瓦礫の撤去が必要とされた。庭 JAPAN のメンバーは、それぞれが自分のユニボやダンブカー、クレーンなどの機器を宮城県石巻市に持ち込み、作業にあたった。「庭師は庭をつくる時には、更地から考えます。ゼロの状態から、その場所にふさわしい庭を歴史や文化、石や土、水、そして植物と人の力を借りて創造していきます」(代表 古川乾提さん)。

何度も足を運んでいるうちに、地元の人たちとの交流も生まれ、仮設に住まうことの苦勞も知った。どの仮設地も殺伐としていると感じた古川さんはその時、木の必要性を感じ第4フェーズの一環として「みらいをうえる」プロジェクトを始動した。木は、プライバシーを守る目隠し、木陰作り、防風と共に、人が集い、未来を共に歩むことの喜びを伝えてくれる。庭 JAPAN のメンバーとその土地に住む

人たちが一緒に、アラカシやシラカシ、ウバメガシ、サザンカなど塩に強く東北の土地に由来するものを植えるという。震災は、そこにあることが当然だったものを奪い去った。しかし人は「未来を植えることができる」と古川さんは語ってくれた。

慰霊の灯り

「こよみのよぶね」は、アーティストの日比野克彦さんが始めた、2011年で6回目になる岐阜の冬のお祭り、庭 JAPAN は第2回から携わってきた。

金剛山の麓、長良川の水面に「時を刻む『暦』を浮かべ、美しく照らしてきた」「こよみのよぶね」。昨年は、この美しい灯りと「思い」を東北の被災地に運びたいという気持ちから、2011年11月12日(土)〜13日(日)、宮城県へ届けられた。場所は、庭 JAPAN の復興支援プロジェクトの活動拠点、石巻の旧北上川。復旧・復興、これからの未来を含んだ希望の数字として運ばれた暦は「2011」。石巻の

人の手によってデザインされた数字をもとに岐阜と東京で竹を組んだ。石巻で和紙を貼ってもらい、船にこよみの行燈を取り付け、現地やボランティアの人々で水面に浮かべられた。そして、その希望の灯りは東京・隅田川、最後に岐阜・長良川へと繋がられた。

大震災から一年、宮城県石巻市の大川地区で行われた慰霊祭では、地元の方たちが用意した祭壇のまわりに、全国から集められたたくさんの鎮魂のあかりを灯した。庭 JAPAN では、モノをつくる能力を持っている人に向けて、近くにあり竹林にある竹や門松で使った竹などを使った「竹あかり」用の照明器具作りを呼びかけた。また全国から苗木を集め献木とした。

この一年、幾度となく東北を訪れ支援活動を行ってきた庭 JAPAN。時間の経過と共に変わってきた被災地の状況を直に感じ、必要とされるものを、全国に広がるネットワークを活かして呼びかけている。